

書評 村瀬憲夫・三木雅博・金田圭弘著

『和歌の浦の誕生——古典文学と玉津島社』

菊 川 恵 三

一

本書は二〇一一年から三年間、都合七回にわたる玉津島神社で開催された「玉津島講座」に基づく。万葉研究者で『紀伊万葉の研究』の著書もある村瀬憲夫氏、平安文学、なかでも和漢朗詠集をはじめとした日中比較文学の視点から優れた業績を残す三木雅博氏、いずれもそれぞれの分野で著名な研究者である。この二人に加え、源氏物語の研究者であり、地元の高校教員として活躍する金田圭弘氏を加えた三名の執筆による。

「はじめに」には「本書の執筆にあたっては十分に連絡を取り合い、一書としての統一と調整を図ってきた。（中略）たんに三人の文章の寄せ集めではない、一貫した和歌の浦へのまなざしを汲み取っていただければ幸いである」とあるように、それぞれの文章には他の執筆者の文章が引かれて、互いの意思疎通がなされたことがわかる。なかには引用だけでなく、他の論により内容が大きく変わっただろうと思われるものもあり（後述）、「はじめに」が言葉

だけではないことがうかがえる。おそらくは、三人の研究者が講座の講演者であると同時に、聴取の一人でもあったのだろう。

実は、本書と同じく和歌の浦を扱った書籍は少なくない。なかでも、蘭田香融監修『和歌の浦 歴史と文学』（一九九三、和泉書院）は、編者の一人として村瀬氏が名前を連ねたものである。この本は、副題にもあるように歴史編と文学編を分け、古代（奈良・平安）から中世・近世・近代へ、あわせて十人の執筆者による和歌の浦研究になっており、古代から近代まで和歌の浦を俯瞰するにふさわしい構成になっている。この本が出版される背景には、不老橋の前に建設予定であつたあしべ橋をめぐる景観保全の機運があつたことが、随所からうかがえる。

それから約二十年、本書では「文学を中心に古代から中世」へと、対象と時間を限定しつつ、三名の執筆者による相互交流を踏まえた論になっている。何がどう深まったのか、景観保全の意識がどう深化してきたのか、そんなことを念頭に置きながらみていきたい。

## 二

はじめに目次と執筆者を示して、本書の全体像をみておこう。

### 第一部 若の浦の誕生―万葉の若の浦

#### 第一章 神代よりしかぞ尊き玉津島山（村瀬）

#### 第二章 聖武天皇の詔の表現と漢籍（三木）

#### 第三章 若の浦に潮満ち来れば―弱浜から若の浦へ（村瀬）

第四章 葦辺をさして鶴鳴きわたる―若の浦の景観(村瀬)

第二部 和歌の浦の誕生―「若の浦」の継承と展開

第一章 古今和歌集の和歌の浦(三木)

第二章 藤原公任の和歌の浦訪問をめぐって(三木)

第三章 衣通姫とその神性(金田)

第四章 紫の上と和歌の浦―衣通姫から紫の上へ、二人を結ぶ和歌の浦(金田)

第五章 『源氏物語』以降の和歌の浦―藤原頼通と和歌の浦(金田)

第六章 小野小町と玉津島―中世玉津島信仰と小町(金田)

こうしてみると、奈良・万葉を村瀬氏、平安前期(和歌と紀行)を三木氏、平安後期・中世を金田氏が分担していることがわかる。なかで異色なのは、第一部第二章である。続日本紀に収められた聖武天皇の詔を、三木氏が和漢比較文学の観点から読み解く。万葉研究者にはよく知られた詔勅だが、中国文学の視点から詳細に読み解いた論は例がない。これまでほとんど問われてこなかった問題が俎上にのぼり、万葉研究者を刺激する。おそらくこれに一番刺激をうけたのは、村瀬氏であろう。第三章はこの三木論を受けて、村瀬氏の新しい赤人歌の理解が示される。なるほどと思ひ、いやいや違うだろうと読み手をゆさぶる。さながら「玉津島講座」に同席したかの気分になる。

それぞれの章段については次にして、目次全体を見渡して注意したいのは、「若の浦」と「和歌の浦」が書き分けられていることである。第一部の題名「若の浦の誕生」が、第二部「和歌の浦の誕生」へと変わる。細かく見ると、各部の題名だけでなく、各章の題名・サブタイトルにまで及んでいる。

「はじめに」に「万葉の「若の浦」は、その後平安、中世と時代が進むなかで…和歌の聖地としての「和歌の浦」

に成長していく」とあり、「おわりに」に「万葉の「若の浦」から平安以降の「和歌の浦」へ」という村瀬氏の識語があり、これが意識的なものであることがわかる。第二部のサブタイトルのみ「若の浦」の継承と展開」とあるのは、逆に万葉の若の浦が変化しつつ継承するのだと察せられる。こう考えると、「和歌の浦はそこにあるもののなのに、なぜ「誕生」なのか」と、奇異に感じる本書の書名『和歌の浦の誕生』にこめられた意図もみえてくるだろう。

### 三

次に第一部に注目してみよう。まず冒頭の第一章で、万葉集・山部赤人の紀伊行幸歌と、聖武天皇の詔勅を含めた続日本紀の関係記述がある。「玉」が繋がった玉津島の様子が、古代和歌浦の復元景観と重ねられる。そこから「玉」の神秘性がとかれ、玉津島での「神祭り」の可能性をいう。いずれも、赤人歌にうたわれた「しかぞ尊き玉津島山」に関係する。さらに、「玉」と「潮の干満」と海神わたづみとの関係を説き、それらが示す神的なものが聖武天皇詔の「玉津島の神・明光浦の霊」とつながることを説明する。

つづいて、行幸従駕における天皇讚美の系譜を人麻呂から赤人・金村へととりつつ、本歌が人麻呂の吉野讚歌における「神の御代」<sup>みよ</sup>を意識して作られたものであるとする。持統天皇即位に関わってよまれた人麻呂歌、その曾孫聖武即位にかかわる赤人歌がつながることで、皇統譜の継承にかかわるとする。

「玉」や「潮の干満」などの歌表現を、集中の他の例をあげながら丁寧を追いつつ、神性や神霊に目配せする村瀬氏の説明は、一般市民にも理解しやすいだろう。また行幸従駕における讚歌を追えば、持統―(文武)―聖武へと続く皇統譜ともつながる。こうしてこの章は長歌の表現と枠組みを明らかにした、赤人紀伊行幸歌の概論になっている。

三木氏による第二章については、先に述べたように和漢比較の立場から、新しい光があてられる。聖武天皇の詔にある「登山望海」について、天子が巡行して国の神や諸神を祭る「望祀」に関係するとの村瀬氏の指摘をうけ、中国詩文の「望海」が神仙につながる蓬莱山を幻視し、また東海から昇る朝日をよむ例が多いことを、『文苑英華』などから明らかにする。そして、聖武天皇の場合も「単に風景を楽しむための遊覧ではなく、天皇として天・地の調和した陰陽の気を身に帯び、蓬莱山に象徴される神仙世界との繋がりを持つとする、一種の神仙思想を背景にしたものと考えられてくる」という。

ここから島々が並ぶ玉津島と、中国詩文の蓬莱・方丈・瀛州の「三山」のつながりを絵画資料をあげながら説く。さらに、聖武詔で「弱浜」から「明光浦」に改めた意図を、単に「明るい光」をいうのではなく、中国宮殿名の由来となった「昼も夜も明るい神話上の仙境」ではなかったかという。これまでの万葉研究では、十分に掘り下げられてこなかった視点だけに、今後議論されるだろう。

次の第三章・四章(村瀬氏)は、赤人歌の反歌二首に焦点を当て、他の万葉歌と比較する。四章に示された俯瞰的開放的景観、躍動する景観は、他の万葉歌と比べた赤人歌の特徴を的確にとらえて説得的だ。

また、三章では「弱浜」が歌の中で「若の浦」と呼ばれることに注目し、「この地が若々しい土地であり、将来の弥栄を約束する土地」として予祝され、「玉津島を讃えるのに相応しい地の名」だとする。この理解のうえに、神仙をイメージする「明光浦」と言われたことを、長歌中の議論のある「そがひに見ゆる」と関係づける。すなわち、南面する天皇の視点を玉津島山に移すために「そがひに見ゆる」といい、さらに若の浦の東方にある吉野を意識したのではという。

新しい視点として注目されるが、一方でこのように用語を手がかりに二つの資料をつなぎ合わせるのには疑問も感じる。三木氏がいうのは、聖武詔は中国詩文の文脈の中で理解すべきだということに尽きるのではないか。それ

が明確に現れるのは「明光浦」の理解である。氏はこの語が「中国での用法はもちろんのこと、「明るい光」という字面の意味でさえも、倭歌の内容に反映されていない」といい、「詔の中だけで特別に用いられた漢語だったのでないか」という。したがって、この「明光浦」は漢語のまま「めいこうほ」と訓むべきだとする。評者はこの考えに賛同する。

これまで聖武天皇の詔は同じ行幸時なので、当然赤人の紀伊行幸歌と関係するはずと考えられた。それゆえ「明光浦」を「あかのうら」と訓み、それを「わかのうら」とつなげてきたのだが、そこには方法論の齟齬があったのかもしれない。一方は和歌の文脈の中で歌われ、一方は漢文の詔として漢文脈の中にある。まずはそれぞれ別のものとして考えるべきだろう。「明光浦」が字面の意味さえも赤人歌に反映されていないのは、そのことを物語る。二つを合体させて、東方の吉野の神仙境と結びつける(第二部第六章と関係)のは、やはり無理があらう。

漢文脈では当然海は東にあり、蓬萊は日の出のそのかなたに浮かぶ。しかし、この地の山に登れば海は西、日の没するところである。そして、玉津島は幻想ではなく眼前に広がる。漢文脈に寄りそうことで神仙の意識を揺曳させながら、それとは違うものとしてこの地を賛嘆したのが聖武の詔だったのだろう。赤人は赤人で、潮の干満によるこの地の風景の変化に心情をふるわせる。天皇讚美のありかたが、かつての人麻呂とはすっかり変わっているのである。

#### 四

第二部第一章は、平安以降の和歌世界の中で「若の浦」が「和歌の浦」と変化していく様子を追っていく——念のために言えば、万葉集では「和歌」は贈られた歌に対する「和なふる歌」の意で用いられており、「和歌の浦」はあ

りえない——。前著『和歌の浦 歴史と文学』では平安朝の和歌を全体としてとらえていて、この転換点は問題にされないが、ここではそれを追及する。これも、「若の浦から和歌の浦」へという視点を導入したことによるのだろう。

結果、一〇〇〇年ごろ一条朝までは「若」であつたものが、平安後期一一〇〇年ごろになると「和歌」と関係づけられるようになることを明らかにする。具体的には、藤原公任・赤染衛門の「わか浦」には「和歌」との関係が明確ではないのに対して、藤原家重、西行は歌合の立会いや、和歌の家と関係づけられた「和歌の浦」が現れることを丁寧に論じる。こうして、平安後期の和歌の隆盛(歌合・百首歌・歌学・歌の家)を背景に、「和歌の浦」が誕生したことが明らかになる。

第二章は平安中期の最大の学者でもあり歌人でもあつた藤原公任が残した私家集『公任集』の和歌の浦訪問記を読み解く。本書の中でも特筆すべき章である。「ひなみの湊」は「根」のくずし字を「浪」と誤つたもので「日根の湊」ではなかったといい、そこから越えて和歌山に入る「かさぎ」は頼通の高野山参詣記にある「笠道山」<sup>かさぢ</sup>だろうとして紀伊統風土記の記述を引く。また、「つくゑ松」、「うしの岩屋」も和歌山に関する古い記録を引きながら明らかにしていく。

国文研究者がまずは開く『新日本古典文学大系 平安私家集』や『私家集全釈叢書 公任集全釈』の説がつぎつぎに覆される。権威ある注釈書の勘違いや、調べの浅さに驚かされるが、これは何よりここに土地勘を持っているかどうかと関係するのだろう。和歌山に住むものには、日根はJR阪和線の駅名「日根野」として身近だし、「つくゑ松」(机状の松)と聞いて根上り松を想起するのも自然だ。

この藤原公任以外にも、和歌の浦を訪問した平安貴族は多く、関白藤原頼通、その子孫藤原忠実・頼長(『台記』)、藤原宗忠(『中右記』)などが高野山・熊野参詣の途次に立ち寄つたことを思えば、どうやらここは遊覧・参詣のメツ

かだったといっているようだ。

ところで、ここまで触れなかったものに、「吹上の浜」がある。第一章では、古今集との関係で「吹上の浜の形に菊植ゑたりけるに詠める」との題詞をもつ道真の歌を引き、『うつほ物語』の吹上の巻が紹介される。万葉集にはまったく現れなかったこの地は、平安朝になると和歌の浦と並び称されるようになる。うず高くつもった砂山と松の緑が連なる風景は、次のように都人を驚かし魅了したようだ。

吹上の浜に至りぬ。風の砂を吹き上ぐれば霞のたなびくやうなり。げに名に違はぬ所なりけり。（公任集）

吹上の浜に來り着く。地形の体たらく、白砂高く積み、遠く山岳を成すこと三、四十町ばかりなり。全く草木無く、白雲を踏む如し。…此の地の勝絶、筆端する能はず。（中右記）

この「吹上の浜」については、第四章の金田氏の文章が詳しい。「紀ノ川河口の南岸から雑賀山にかけての一带を吹上と通称、標高二〇メートルに及ぶ地点もある」という『和歌山県の地名』の記述を引き、「相当巨大な砂丘、あるいは砂漠といつてよい砂浜」だったという。現在からはとても想像できないが、実は評者にも思い当たることがある。本誌の性格に甘え、少し横道に入ることが許していただきたい。

数年前、教育学部附属小学校の校長を拝命した。学校があるのは和歌山城から道一つを隔てた南、かつての師範学校があった場所だった。東日本大震災の後だったので、南海地震と津波が切実な心配になり校地の高さを調べた。小学校校舎のある場所が、この周囲では例外的に高い十四メートル。さらに、一段と高くなっている「おくやま」と呼ばれたグラウンドは約十九メートルとわかった。グラウンドには、今や市内でもめずらしくなった根上り松が、なぜかぽつんと一つだけ残っている。

実はこの地は砂山で、かつては和歌山城の基礎となった岩山からなだらかに続いた松林だった。実際、学校の古



いアルバムをみると、詰襟の学生服を着た大学生が松林で歓談している。附属小の教頭先生は、大雨がふるとグラウンドの砂が多量に校舎側に流れてしまい、土止めが大変だと嘆いた。どうやら、根上り松がグラウンドに残るのは、このように砂地が絶えず流されたからだったようだ。

附属小学校はかつての吹上の浜の一角に建ち、「標高一〇メートル」の砂山は学校の中に残る。そういえば、附属小・中学の校章には道真の古今集歌からとった菊がアレンジされている。ここから和歌浦まで約3〜4キロ、この地名は和歌山市吹上、旧教育学部は真砂キャンパスと呼ばれ、その南に和歌山市立砂山小学校がある。金田氏のように、砂浜を髣髴とする地名が和歌浦に続いている。

第四章で、この吹上を舞台にした『うつほ物語』と近年発掘された関戸遺跡との関係をとく。関戸遺跡は吹上をずっと下った和歌浦の北にあり、律令期の銭、国分寺と同じ瓦が出土したことを記す。どうやら広大な吹上の浜に続いて、現在とは違い大きく南に蛇行した紀ノ川河口に関戸遺跡と和歌の浦、そんな風景があったのだろう。このように、古代の景は我々の想像を超えたものであったことが予測される。歌の表現を、現在の風景に照らして理解しようとするとき、思わぬ落とし穴があることを心に留めておきたい。

## 五

第三章は衣通姫の伝説を記紀万葉から確かめ、平安後期の古今集注釈の世界から「和歌の神」「玉津島神社」と連動して浮かび上がってくることをいう。さらに、南北朝の『神道集』には衣通姫が帝の後を追って、和歌の浦で身を投げ現在の玉津島明神となった由来を語る。この衣通姫と玉津嶋神社の関連は、三木氏執筆の第六章（小野小町と玉津島）に引き継がれる。

古今集仮名序に衣通姫の流れとされた小野小町だが、六章では「小町物」と呼ばれる能をめぐって考察が進む。どうやら古今集注釈という狭い場から、能楽という芸能に取り上げられることで格段に広がっていったことが予想される。さらに、高野山・丹生津比売神社の神輿が玉津島神社に運ばれることは、中古・中世の信仰のありようがうかがえる貴重な資料である。

第四章の源氏物語との関係についても、興味深くよんだ。うつほ物語と吹上は有名だが、源氏と玉津島とは意外だった。若紫巻といえ、病平癒に北山を訪問した光源氏が、幼い紫上を見初める有名な場面が思い浮かぶ。「すずめの子をいぬきが逃がしつる」と目を赤くしながら訴える可憐な少女の姿に光源氏の目は釘付けになる。

やがて彼女を庇護する祖母が逝去すると、後見の女房に少女の後見者となることを懇願する。ここで源氏が「あしわかの浦にみるめはかたくとも」という歌を贈る。この歌は、その前に贈った和歌「いはけなき鶴の一声聞きしより葦間になづむ舟ぞえならぬ」と関係することを教えてくれる。「鶴の一声」が少女をさすのは、「いはけなき」とあるのに明らかであり、「葦間」をうけて次の「あしわかの浦」歌いだされる。これらが、赤人の「若の浦に：葦間をさして鶴鳴きわたる」に拠っているのは明白だ。古今集仮名序に記されたこの歌が、源氏物語の中で幼い紫の上をめぐるやりとりのなかで再生される。それは、金田氏が指摘する「光・若・美」として、平安貴族たちに新たなイメージを付与していくことになる。

『風雅和歌集』に残る「和歌の浦」の歌は、散逸した物語『浦風にまがふ琴の声』に存したもので、風と琴の音は源氏物語中の須磨・明石巻と通じることを指摘する。そして、明石入道の話は、若紫巻で紫の上を垣間見る直前に現れる。若紫―紫の上―赤人和歌の浦歌は、和歌の浦―琴―明石巻へとつながる。こうして、源氏物語を通じて和歌や物語が連想の糸でたぐりよせられていることがわかる。

冒頭、前書『和歌の浦 歴史と文学』と比べ、本書がどう違ってきたのかと問いかけた。こうしてみると、前書が通史として歴史・文学に多くの視点を提供しているのとは違い、本書は文学・古代と中世に焦点を絞りながら、和歌浦がどのようにつながり、どのように変わってきたのかを明らかにしようとしたことが判る。そこには、前書が景観保護を喫緊の課題となるなかで、人々の意識の喚起を心がけたのに対して、本書が三年にわたる市民講座のなかで、講師相互と聴衆の交流の中で生まれたことをうかがわせる。そこに共有されているのは、「私たちの和歌の浦」という視点であろう。本書を影で支え、紀州経済史文化史研究所の一員として活躍された故米田頼司教授もその一人である。

二〇一六年四月二〇日刊、清文堂出版 A4版 二〇五頁

